

◆アジア・太平洋の映画産業に最も貢献した映画人へ贈られる：APN アワード授賞式

■開催日：10月26日(水)

■会場：六本木ヒルズ・森タワー 六本木アカデミーヒルズ オーディトリウム

アジア太平洋地域の映画プロデューサーたちの親交を目的として2006年に発足した任意団体 APN (アジアパシフィック プロデューサーズ ネットワーク)。本年年次総会の開催地が東京であることを機に、東京国際映画祭は APN と連携し、海外 50 名、国内 50 名、総勢 100 名以上のプロデューサー陣を迎え、様々なセミナー、ピッチ、APN アワード授賞式等を行った。

「APN アワード授賞式」では、アジア・太平洋の映画産業に最も貢献した映画人として、俳優・浅野忠信、女優・桜庭ななみ、そして、本映画祭のアジア・オムニバス映画製作シリーズ「アジア三面鏡」プロジェクトの第一弾に、監督の一人として名を連ねる行定勲にアワードが授与された。

■受賞者のコメント：行定勲氏

「最近の自分のテーマは“越境”です。越境することで新たな自分を見つけ出したい、と思っていたところに、今回の受賞があり、嬉しく思っています。海外の撮影では、自分の考えが覆されることが多いのですが、それでも映画は作れるのだと学びました。自分からその環境に飛び込んでいくことが大切で、その経験から、さらに強くなれるのではないかと思います。」

桜庭ななみ氏

「中国・台湾・韓国への興味から、色々な映画・ドラマを鑑賞し、そして言語の勉強をしてきました。それが今では仕事に繋がっていて、まさか自分が海外で仕事をすると、と驚いています。海外の現場で、アジアの先輩方と繋がりを持ったことが勉強になっています。これからは言語力をさらに磨いて、アジアの作品にもたくさん出演していきたいです。」このコメントの後、“日本のみならずアジアでも活躍していきたい”という強い思いを流暢な中国語・韓国語で語り、会場を驚かせました。

浅野忠信氏

桜庭さんが中国語・韓国語でもコメントしたことを受け、“ニーハオマー”(中国語)“アンニョンハセヨ”(韓国語)と挨拶。「僕が話せるのはこれくらいですが、モンゴル語の台本を二冊覚えた経験があり、演技であれば、もうどんな言語であっても話せると思います。これほど大勢のプロデューサーの方が集まることはあまりないことですので、今回の受賞が、新しい作品への出演に繋がると嬉しいです。」と語り、国際派俳優自らの売り込みに、会場は笑いに包まれた。

◆第 29 回東京国際映画祭プレゼンツ 「歌舞伎座スペシャルナイト」日本映画史を彩る名作の復活 & 〈喋り屋〉古舘伊知郎の軽快トークが止まらない!

■開催日：2016年10月27日(木)

①歌舞伎座 正面玄関でのフォトセッション・ひと言挨拶

登壇：尾上菊之助・古舘伊知郎・片岡一郎 16:10～

②トーキング忠臣蔵 出演者：古舘伊知郎 17:30～

③特別上映『血煙高田の馬場』出演者：古舘伊知郎 18:10～

④特別上映『忠臣蔵 デジタル最長版』出演者：片岡一郎 18:20～

⑤舞踊『鶯娘』出演者：尾上菊之助 19:40～

■ご入場者数(マスコミ除く)：計約1000名

第 29 回東京国際映画祭では、メイン会場の六本木ヒルズ周辺は、映画祭を待ち望んでいた映画ファンたちの熱気に包まれていたが、盛り上がっているのは六本木ヒルズだけではなく。日本を代表する街・銀座の歌舞伎座では「第 29 回東京国際映画祭プレゼンツ『歌舞伎座スペシャルナイト』」が開催され、長年の映画ファン、歌舞伎の女形が演じ

る舞踊の代表曲を待ち望む歌舞伎ファンなど、様々な客層が集結し、六本木に引けを取らない盛り上がりを見せた。

イベントのスタートを飾ったのは、フリーアナウンサー・古舘伊知郎氏。〈喋り屋〉の名に偽りはなく、冒頭から軽快なトークを次々と披露。まだ着席できていない観客の方への声掛け、舞台の定式幕が実は人力で操作されていることをボロリと明かす軽妙さに、会場の笑いが止むことはなかった。同時通訳者も思わず汗をかくようなスピーディーな喋りを繰り広げた後には、昭和初期の無声映画『血煙高田の馬場』の現代版弁士を務め、会場の観客の心を一気に鷲掴みにしました。興奮が冷めやらぬうちに登場したのは、現役弁士の片岡一郎氏。日本にわずか 10 名しかいない活動写真弁士の一人であり、最近では海外での公演も増えている実力派。今回は、日本最初の国民的スター・尾上松之助が大石内蔵助を演じた『実録忠臣蔵』(公開時の題名)を、生演奏と共に披露。その重厚な語りは、観客を『忠臣蔵』の世界に一気に引き込みました。堂々たるトリを務めたのは、尾上菊之助。変化に富んだ構成、引抜きなど、歌舞伎ならではの技巧をふんだんに用いた人気の演目『鶯娘』を披露。人間の男との道ならぬ恋に思い悩み、次第に本性を顕にさせる鶯の精を熱演した。

歌舞伎座正面玄関でのひと言挨拶

★舞踊『鶯娘』出演 尾上菊之助

「『鶯娘』は、歌舞伎の女形の“美”がぎゅっと詰まった舞踊です。冒頭、鶯が娘の姿となって踊り始めますが、最後は恋敵に切りつけられ、鶯の姿に戻って死んでいくというお話となっています。さらに、衣裳が一瞬で変わる“早替り”は、歌舞伎以外ではあまり見られない珍しい演出です。ぜひこちらにも注目していただきたいと思っています。坂東玉三郎さんに指導して頂いたこの作品を、ここ歌舞伎座で演じられることを誇りに思います。」

★『血煙高田の馬場』現代版弁士〈喋り屋〉古舘伊知郎

「本日のメインである片岡一郎さんの『忠臣蔵』も、尾上さんの『鶯娘』も舞踊に非常に面白そうで、当初は尾上菊之助さんと一緒に『鶯娘』を舞いたいと思っていたのですが、ダメだと言われまして。(笑) この歌舞伎座の目の前で、こうして 3 人揃ってマスコミの皆さんに深々と頭を垂れていますと、海外のプレスの方には伝わりにくいかもしれませんが、複雑な心境です。通りすがりの人も、なんだろうと私たちを見ていますね。(周りでその様子を見ているお客様に向かって)『どうか我が党に清き一票をお願いいたします!』(通訳に向かって)すみません、通訳のしずらい内容になってしまって。とにかく今日は、しゃべり狂って帰るだけでございます。海外から来ている方は、私のしゃべりの時に、本当にイライラすると思います。同時通訳なんてできる訳ないですから、とにかく喋りまくって、脱線もします。(笑)」

★『忠臣蔵 デジタル最長版』弁士 片岡一郎

「私は、弁士の面白さや凄さを世界中に広めています。活動写真と弁士の活動は、常に現在の人間が過去の作品を語っているという事です。それは、昔の作品が、現代の私たちの問題として蘇り、現代を生きている私たちにどのように響くか、ということを問いかけています。ぜひお楽しみください。」

◆審査委員&受賞者記者会見

■日時：11月3日(木・祝) 16:30～19:30

■場所：EX シアター 2F ラウンジ

■登壇者：コンペティション国際審査委員、各賞の受賞者

① 審査委員記者会見

<審査を終わって一言>

ジャン=ジャック・ベネックス審査委員長

「すばらしい映画祭でした。いい映画をたくさん観ることが出来ました。さまざまな映画の中にどの映画においても、現代の不安な議題があ

りました。」

メイベル・チャン

「賞が足りなかった。いい映画がそれだけあったということ。プロデューサーとしてリメイクしたいと思っているくらい。」

ヴァレリオ・マスタンドレア

「始まる前から楽しめる自信がありました。人間として磨き上げられるだろうし、映画のことは一貫性を持っていると思う。SNSで世界は小さくなってきているかもしれないが、さまざまな視点を見る事が出来た。違いこそ人間が持っている財産である。」

ニコール・ロックリン

「いろいろな意味において、目から鱗でした。女性監督、女優の演技のすばらしさがよかった。」

平山秀幸

「まったく日本で知られていない映画をそれぞれが描く世界は異なるが、共通しているのはどの作品も震えている。作り手が震えている、不安になっているのを感じた。楽天的な映画が一本もなかったのが印象的。個人的には審査委員よりも映画を作っている方が自分は向いているなと思った（笑）」

Q：日本映画について行われたディスカッションは？

「審査委員が話したことは秘密です（会場爆笑）。日本作品は対照的な二作品でした。日本の伝統的作品、もうひとつはワイルド。ふたつの対照的な異なる視点を見せてほんとうの真実は二作品が歩み寄った中間にあるのではないかと思った。」（審査委員長）

Q：グランプリ作品の議論が別れたのか？

「ふれあいを深めていくというメッセージ。」（メイベル・チャン）

② <日本映画スラッシュ／アジアの未来・国際交流基金アジアセンター特別賞>

渡辺紘文監督『プールサイドマン』

「東京国際映画祭は三回目の出品でそのすべてが低予算の自主映画。そこで自分のスタイルが出来てきたので、それを完全に捨て去ることはできない。しかし今後は違うスタイルを確立することも自分の課題だと思っている」

ミカエル・レッド監督『バードショット』

「父は映画を作れと強制することはなかったが、子どもの頃から名作に触れる機会は多かった。映画学校にいろいろ通った。長編一作目もT I F Fに出品できた。」

Q：劇中で描かれる女性像はインド女性が抱える一般的心理なのか、そうではないからそれを鼓舞するものなのか？

アランクリター・シルバスター監督『ブルカの中の口紅』

「インドは多様性のある国。特に小さい村に住んでいる女性は大きな変化に踏み出そうとしている。自由に生きたいと願う女性を描くことで、何かきっかけを与えることになるかもしれない。」

Q：兄弟で監督することについて

渡辺紘文監督『プールサイドマン』

「世界には尊敬する兄弟監督がたくさんいます。僕たちは役割が分かれていますので、弟がいるからこそ自分の役職に専念できる。弟はとても大きな存在です。」

③ <最優秀男優賞／観客賞>

パオロ・バレステロス『ダイ・ビューティフル』

「ジュリアになるのは大変だった。外見を整えるのに3-4時間かかる。すべて自分でやっている。初主演映画が東京でワールドプレミアで、主演男優賞まで受賞して本当に感激している。」

Q：現場での監督と役者についてどうだったか？

プロデューサー「私は幸せなことに前回T I F Fに出品された作品もいっしょに作った。それぞれの役者のユニークな面を引き出すことがうまい。そのキャラクターの過去に何があったかをよく話しています。」

Q：昨今のフィリピン映画の充実ぶりについて

ジュン・ロブレス・ラナ監督

「デジタル技術の発達に伴い、金銭面が抑えられ、作りやすくなってきたことが大きいと思います。それで新しい才能が出てきた。主流ではない映画が増えてきています。」

パオロ・バレステロス

「俳優として、一人のフィリピン人として感じていることは、フィリピンの人が違うスタイルの映画を楽しめるようになってきていることが大きいと思います。」

④ <最優秀女優賞／審査員特別賞>

レーネ＝セシリア・スバルロク『サーミ・ブラッド』

Q：今後はトナカイを育てる仕事を辞めて女優になるか？

「まだ分かりません。そうなるかも知れませんね。」

アマンダ・ケンネル監督『サーミ・ブラッド』

Q：レーネが最優秀女優賞を受賞したことについてどう思うか？

「誇りの気持ちでいっぱいです。国際サーミ民族協会から協力を経て作られた初めての映画。制作スタッフにもサーミ族が多い。サーミ族のコミュニティを出ることで非常に価値のあることです。」

⑤ <最優秀監督賞／最優秀芸術貢献賞>

最優秀監督賞 ハナ・ユシッチ監督『私に構わないで』

Q：次の世代を鼓舞すること、観客を幸せにすること、人生における教訓を学ぶことのうち映画を作る上で最も大切なことはなんですか？

「どれも大事ではないと思います。私の映画は観客を幸せにする映画ではありませんし、何かを教えるために作っているわけではありません。映画は何かを感動させるものであることが大事だと思っています。」

最優秀芸術貢献賞

メイ・フォン監督『ミスター・ノー・プロブレム』

Q：本作の元の短編を映画化しようとした動機は？

「文豪ロウシャは私の大好きな作家ですが、『ミスター・ノープロブレム』の原作はそんなに有名な作品ではなかったです。初めて読んだときはとても驚きました。ロウシャの他の作品とはかなり作風が違い、この作品を通して中国人、中国文化を鋭く観察していたのでこの作品を原作にして映画を撮ろうと思いました。」

⑥ <東京グランプリ>

クリス・クラウス『ブルーム・オヴ・イエスタデイ』

Q：具体的に作るのが難しかったのは？

「テーマにあると思います。痛ましいテーマにありつつ、ユーモアに溢れるものにしたのが難しかったです。」

Q：ナチズムの加害者の孫と被害者の孫が出会って許し合い未来に向かうという構造はどういう経緯を経て考え付いたのか？

「まず私自身の家族のリサーチから始めました。記録資料を見つけに色々な所に行きました。そのときに被害者と加害者のそれぞれの孫の世代が楽しそうにしていることに気がきました。特にユダヤ人の孫世代が自分たちの辛い過去を冗談にしていることに気が付き、このテーマをもっと違う軽さを持って描くことが大事だと思いました。」

Q：ナチスの歴史を語りながらラブストーリーにすることにどう感じましたか？

「最初に脚本を読んだときに非常に感心しました。二つのテーマが同時に混ざり合っていることが好きでした。」

Q：20歳のときにジャン＝ジャック・ベネックス監督の作品を見ていたというが、その頃の話の聞かせてください。

「『ディーバ』も『ベティー・ブルー』も見ました。ベネックスは長年のヒーローだったので同じ舞台上に立てて本当に幸せでした。」

Q：ラストシーンには未来に対する思いを込められているのか？

「私のロマンティックな心が込められています。和解に対する希望が表れていたらいいと思います。彼らは映画の中で長い苦しみを経て最後に小さな希望を見つけました。二人が一緒になるかどうかはわからないが小さな希望があるように感じています。」